

サマータイム・ブルーズ



真下 魚名

梅雨明けとともに鳴出した蝉の声で目覚めた朝は、あまり上等とはいえないな。昨日飲み残したビールを水代わりに飲んだら、いやなこといっぱい思い出した。まったく、何のために酔っぱらったんだか。

前夜祭なんて、やるんじゃなかった。

テレビでは、何時間前に起きればこんなにさわやかなんだろうって人が、高気圧を指差して笑ってる。

今日は一日中、カンカンデリですね。
外回りの人、御愁傷様。私は一日中パソコンと睨めっこです。
パソコンが男の子だったらねー、モウチョト気合い入れてメイクするんだけど。

おやー、朝からメールかユキー。まだ会社にも着いてないだろう。

"人身で電車遅れてる。"

で、アタシにどうしろって言うの？

"諦めてジョウブツしてくれ。"
こんなメール打ってる場合か。

週末の部屋って、脱いだ服が散らかってていやになる。

きっと明日には片付でしょう。片付くって言うのは、部屋の隅っこに積み上げるって言う意味じゃないよ。

ちゃんど洗濯して、アイロンもかけて、畳んで引き出しに入れるってことだ。
だから、明日の私、よろしく願いしまーす。

あー謙虚だ、謙虚だ。

日差しが馬鹿みたいにきついな。

電車が遅れてるんだったら、急いで行くことはないんだけどね。
でも身に付いた習慣っていうやつは、時計みたく家にポイッて置いてけぼりには出来ないのだよ。

家を出てしばらくはまだ冷気の名残がカラダに残ってて、それが蒸発してしまうまでは汗も出ないんだけど、この角を曲がると、遮るもののない朝日が顔面に。

あじ——。

耐えてね日焼け止め。

もうシミに残る歳なんだから。

そしてホームの端っこが。

うわー、いるいる。

人がうじゃうじゃ。この現実を知っててあそこに行くのは馬鹿なのだ。

丘の上には馬鹿ばかり、って曲無かったかな。

駅前の自称カフェに転がり込んで、チーフには一応ケイタイ入れとこう。

昼間にこういうところでさぼりたくなるサラリーマンの気持ち、わかるなあ。

やっぱ涼しいよね。オアシスだよ。

もうちょっとで、ブラウスの背中、べったりとくっつくところだったから。

そしてこんな店でも、バリスターの蒸気の声は気持ち良い。

この時間でも自動ドアの外は暑いのだよね。

朝だよ朝。まだ朝。

でも、暑いからってアイスコーヒーを頼むなんていう愚行は、私の流儀にはない。

アイスコーヒーは、コーヒーじゃないよ、ねえお兄さん。

「250円になります。」

この際お金なんてどうでもいいじゃない。

いまホットな話題の核心は、アイスコーヒーが、コーヒーか否かに有ると言うのに。

「ワンアメリカンはいりませーす。」
はあー、日本語の乱れも極まったね。
私はアメリカ人じゃありません！
・・・も、は、や、八つ当たり。

どっこいしょ。
・・・うわーやっちまった。朝イチでどっこいしょだよ。
しかもテーブルに運んで座るだけなのに。まだ三十路には16時間の猶予があるっていうのに。

まあでもこんなだから、遅刻決定した瞬間に、お茶してるんだらうな。
遅れてるって分かってる電車をホームで待つ人と、遅れてるから遅れて行こうっていうワタシみたいな人間の違いて何なんだらうね。

人って何処かで聞いたことのある音楽って案外覚えてるものだけど、そういうのって、こういう所で聞くのかなあ。
今かかっているこの曲。
ブルーズって言うんだっけ。
ブルースじゃなくてブルーズだぜ、って。わたしには違いが分かんなかったけど。

あのとき聴いた曲。覚えとこうと思っても、いざ思い出そうとすると無理だったりする。
残念だけど人ってそういうものが記憶できるほど頭はよくない。

目でみたものは、案外覚えてるのにね。服装とか、仕草とか。
私の仕事ってそういうの上で成立してるのかも。
こうして店の前を過ぎて行く人たちを見ていることが、記憶のどこかで熟成されて、いつか違う形で蘇ってくる。

ナンテネ。単なるさぼりだし。
さて、飲んじゃったし。そろそろ行くかな。

「オイワさん、ごゆっくりですね。」

「こーら、何偉そうな口聞いてんの。」

まったくこいつと来た日には。

「昨日のあれ出来てるよね。」

「朝イチで回しときました。」

今朝はコーヒーはもういいや、さっき飲んで来たし。

どーれ。

カチカチっと。

朝イチじゃないだろ、このタイムスタンプ。まったくもう。

でも、まあ、成る程ね。ちょっとは使えるようになったな。

しかし、だ・・・何これ。

「レイアウトはいいね。けど、この色何とか成らないの。このパレットから持ってきただけの退屈な配色。」

「何ですけどね。」

ですけどじゃないよ。

「こうやってオブジェクトを選んでコピペして、こっちがオレンジ、こっちがグリーン。レイヤーを少しずらして、ちょっと透かすだけで印象違うだろう。」

「さーすがオイワさん。」

「さすがとか、言ってんじゃないよ。色は重ねとブレンドだって、何回いわせんの。」

ほんと、美大でなにやってたの。

なーんて言うと、まるっきりオバサンダ。

そんな年なのか。夢みる頃は過ぎちまったかな。

わたしも誰かさんに何回も怒られて、仕事覚えて来たんだけどね。

夢見た頃は腕がなくて、腕が上がったら夢が無くなった。

さあてえと、自分の仕事かたづけようっと。

こいつの期限は、こっちのポストイットに書いてある筈。

「オイワサン、ちゃんとスケジューラー使いましょうよう。」

「そいつがリフィール書き換えてくれるんならね。」

「レイアウト以外は本とアナログですよねー。」

やたら語尾延ばすな！

「あ、なにこれ・・・。」

「さっきチーフが貼って行きましたよ。」

『プレゼンは今日に変更。文句は客に言え。』

サボリの罰かあ。そりゃあんまりだよ、コーヒーの神様。

「サル。状況は把握したな。」

「しましたけど、サルじゃなくてさとるです。」

「現時点を持って修正を凍結する。A案、B案、C案全部カラーでプリントアウトして。」

「C案なんて半分もできてませんよ。」

「残りの半分は、アタシの美貌と色気で補うわ。」

・・・なにそれ。無言の抗議ってやつ。

みてろよサル。コンペに勝って、この仕事もぎ取って、お前を残業地獄に落としてくれる。

「チーフー、コンペ何時からですか。」

「昼イチ。デキテルー？」

「出来てますよー。ぜ～んぜん自信無いのが二つと、箸にも棒にもってのが一つ。」

「上出来じゃない。」

な～に～が～。聞いてんのかおまえわー。

「じゃ、昼はシッカリ食べて気合入れて行こうねー。」

別に事務所が小さいからって言うわけではないのだろうけど、プレゼン用の荷物を両手に抱えてタクシーを停めるのって、大変なんだよね。

足上げるわけにも行かないしさ～。

特にこんなに暑い日にはさ。

「チーフ～、クルマ買しましょうよ～。」

「この案件取れたらねー。」

なんて会話、何年目だっつーの。

まあ、ウチの会社がケチだって言うのとはね、違うってところは私も分かってるんだけどね。

パソコン何かには惜しみなく金を注ぎ込んでるし、オフィスも綺麗だし。

そう言うところは気に行ってるんだけど、でもこう言うところにケチ臭さが漂うんだよね。

ライバルが外車で乗り付けたりするじゃない。そう言うとき、競る前に負けたって気に成る。私ってセレブとは無縁な女だわ。

あ、着いた。

クルマを降りて、この一瞬がたまらなく蒸し暑い。

「気合い入れて行くよー。」

喋んの私だろ！

「そうだオイワチャーん。」

何、その気持ち悪い笑み。悪寒走る～。

「誕生日オメデトウ。三十路なんだってねー。」

このオヤジ！

まだ11時間あるっつーの！

プレゼン終わったらブツ殺す。

つか、やる気失せた。

つかみ滑った～。

後はもう、何喋ったか覚えてねー。つか、早く忘れたい～。

全部こいつのせいだ。

「絶好調だったねー、オイワちゃん。」

なーにが。

「立て板に水？火に油？」

こいつが誕生日1日間違えるからだ。

「取れるといいねーこの仕事。」

とれないと、そのうちみんな日干しレンガだっつーの。

でもって、こういう時に限ってタクシーが来ないんだよね。

「コーヒーでも飲む？オイワちゃん。」

さすがにアイスでいいや。今回は。

「おつかれさまでした。どうでした？」

はは、多分、化粧全部流れ落ちてるわ。あんたの聞くだけやぼですかねえ、って顔に、そう書いてある。

「今日はもう急ぎの仕事はないから、早く上がっていいよ。わたしもそうする。」

「そうですか、じゃ、仰せのままに。」

どんな時代劇だ。

どっと疲れた。

ウチは3番手だったなあ。

1番目が本命で、2番目は対抗馬ってところかな。

うちは大穴、って言うんだっけ、こういうの。

部屋に入った瞬間、2本聞いて、もうちょっと疲れましてって空気だったもんね。

それみた瞬間、アドリブの効くC案で行くしかないって思ったんだけど。

変な下心出して、“つかみ”なんていれなきゃよかったよ。

疲れてるときに、あれはないよねー。

にこっと笑って、オヤジを緩ませられる年齢はすぎちゃったし。

でも、最後まで聞いてくれてよかった。途中で、もういいから帰って、にならなくて良かったよ。

そうになったら、サルの苦勞が報われない。

A案もB案も、こいつの力仕事で成り立ったようなところもあるからな。

「チーフー。」

「なに？オイワちゃん。」

「お得意さん周りに行ってきます。夕方戻りますから。」

「うんご苦勞さん。南方さんによろしくね。」

はいはいー、と。

この先、ちょっと暇になりそうだからちっちゃい仕事でも取りに行かないと。

それと、あのまま仕事場にいるのもちょっと気がめいる。

南方さんか、そうだな、季節もので何か仕事有るかも。
頼りなさだけど、ちゃんと把握してるじゃないチーフ。

うえっぶ、今日何杯目のコーヒーだろう。さすがにきついなー。

1日8杯飲むときもあるっていったな、あいつ。

そうそう、ケイタイ震えっぱなしだった。

「もしもーし。」

『あ、オイワちゃん。遅ーい。』

チーフじゃなくてチイママか、あんたは。

「どうかしました。」

『コンペ、決勝進出よ！』

はあ？

「コンペって、今日の滑ったやつ？」

『そうそう、それ。』

なんで？

『あっちの社長が、もう一回見たいんだって。』

「余興か、あたしゃ！」

『まあまあ、何でもいいじゃない。チャンス貰えたんだから。』

「納得いかない。」

『社長様っていうのはね、とっても忙しい人なの。酔狂で業者を呼んだりしないよ。』

そうか。でも、何でだろう？

いいかげん、直帰しようかとも思ってたけど、戻ってC案仕上げなくちゃ。

『ちょっとサトルに代わるよ。』

ん？サルが何？

『オイワさん、続きやっときますから今日は帰ってください。』

「続きって、分かってんのオマエ。」

『C案でしょ。あれ面白いしやらせてください。一応ラフも見てますし。』

「また、調子のいい事言って。」

『センパイ今日は“あの日”なんでしょ。』

えっ。

「なんでそんな事知ってんの？」

『中津さんに聞きました。今日は特別な日だから、オマエが頑張れって。
なんの日か迄は聞いてませんけど。』

また余計な事を……。でも、
「じゃあちょっと頼んどくかな。ちゃんとやっつけよ。」
『ええ、もうバッチリっす。』

まず、その日本語の乱れを何とかしろ。

デパ地下で、いつもより贅沢な弁当と、女子らしくケーキなんぞ買っちゃった。
窓の外が明るい夕方の電車なんてのるの、何日ぶりだろう。
普段とは客層が全然違うし。
若い子おおいなあ。遊ばないのかな最近の子は。遊ぶお金無いか。

駅から歩くだけで、また汗吹き出して来たよ。
部屋は相変わらずだけど、、、朝のまんまだな。まったく。
エアコンもつけっ放しだし。
止めたら部屋のどこかで何か腐るんだろなあ。
そうになったら、自分でも笑っちゃうけどね。

ドラマなんか見ても誰が誰だかわかんないし、結局ニュースつけて、天気予報見て、
この気象予報士って、何人いるんだろう。ニュースごとに変える意味あるの？
な～んて突っ込んで。

今日は酒やめようと思ったけど、買ってあげれば良かった。

シャワーでもするかな。

12時越えた。

今日から30歳。

なんて事ないな。

「はい～、こんな夜中にどうしたの、、、一人よ、一人。心配要らないから。え、そっちの方が心配？どういう意味それ。

だ一かーら、その話はいいって。いまさら見合いなんて出来ないし。孫なんてタカユキで十分でしょ。

え？

出来たの、もう？

二人目かあ、ミエコやるなあ・・・。

だからその話はいいって。

ワタシ仕事好きだし、辞める気ないし・・・。

で、なんでケイタイ？

あー、覚えてたんだ。一応ありがと。

娘の誕生日ぐらい、って、ぐらいってどういう意味。

だ一かーら、孫はミエコの次のでいいじゃない。

増えたんだし。

皺？、今更ワタシのせいにすんな。

わかった・・・わかった・・・。

そのうち帰るから。

温泉でもつれてってあげるから。

うん・・・じゃあね。うん。

・・・ありがとう。

・・・おやすみ。」

まったく母親ってやつは。どうしようもないなあ。

なんてことしてる間に、ぽつぽつメール入ってるじゃん。
ワタシって人気者！？

あーん、ユキかー。
思えばあのメールが今日の怒濤の始まりだったなあ。
なんかおごってねー・・・と。

サルからだ。
ちゃんと仕事したかあ、オマエ。

『オイワ先輩30歳の誕生日
おめでとうございます。
C案今晚中に仕上げます。
ただいま貫徹祭りでーす。』

げ、まだやってたの！
若いのーオヌシ。

よし、
『頑張れ、シネ、骨は拾って
やる。』

仕事で徹夜することが、嬉しかったときもあったなあ。
自分がすんごく頑張ってる気がして。
頑張って、あいつに褒めてもらった時、嬉しかったあ。

あれから。
もう昨日になっちゃったけどね。
6年目か。

ねえ、ワタシ30歳になったよ。
あなたと同じ年だよ。

あなたが山で逝って、6年もたっちゃった。

悲しみはもう薄くなったけど。

いまは。

あなたが歩めなかった人生を、
これから一人で歩いて行くのが、
少しだけ寂しいです。

(・・・続く、、、のか?)